

氏名(本籍)	吉崎真弓(北海道)
学位の種類	博士(芸術学)
学位記番号	博甲第5804号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	『萬朝報』投稿漫画欄 「端書ポンチ」(1907-1924)の研究
主査	筑波大学教授 博士(芸術学) 守屋正彦
副査	筑波大学教授 博士(芸術学) 五十殿利治
副査	筑波大学准教授 博士(工学) 山本早理
副査	早稲田大学教授 丹尾安典

論文の内容の要旨

(目的)

本研究は、1892年に創刊された新聞『萬朝報』紙上において、1907年1月から1924年6月まで17年半の間ほぼ毎日掲載された投稿漫画欄「端書ポンチ」6,262点について、投稿者の人物像や特徴、主題の傾向からみる社会状況や描かれた「国民」の変貌を、歴史的背景を踏まえながら検証し、「投稿」という特色を備えた「端書ポンチ」の意義を検討する。

(対象と方法)

序章で先行研究と本論の構成を述べ、投稿漫画欄「端書ポンチ」6,262点について、投稿者の人物像や特徴、主題の傾向からみる社会状況や描かれた「国民」の変貌について、歴史的背景を踏まえながら検証するため、第1章で「端書ポンチ」の概略と『萬朝報』について、第2章で「端書ポンチ」の始まった背景や他紙の投稿漫画欄、職業漫画家の新聞漫画について、第3章と第4章で1916年までの前期と1917年以降の後期に時期を区分して、それぞれ投稿者と主題の傾向を検討し、第5章で「端書ポンチ」に徐々に登場してきた「国民」や「市民」について考察し、終章で本論の内容をまとめ、下記の結論を導いた。

(結果)

「端書ポンチ」を通観した本研究は、紙面に登場した多数の投稿者の存在や、画風の単純化・個性化への変遷を通して、読者が発信した社会に対する視点を明らかにした。「端書ポンチ」は『萬朝報』の主張に合致する内容で、且つ限られた大きさの範囲内という表現上の制約がありながらも、投稿者同士の成長を促す場としても機能し、投稿者(読者)、採用者双方が、社会や漫画界の流行に敏感に反応し合い、影響を受けながら時代に沿った絵柄を紙面に供していた。このように「端書ポンチ」は、投稿者たちの表現方法の変遷や意見、要求を具現するとともに、美術史や漫画史の領域を越えた好個の史料性を有する漫画欄であったと指摘し、結論とした。

(考察)

第1章では、「端書ポンチ」の体裁、募集記事や掲載媒体である『萬朝報』と、挿絵担当者および「端書

ポンチ」が始まった背景について検討し、当時における文化的背景を素地として、読者参加の投稿漫画欄「端書ポンチ」の息吹が窺えることを論じた。

第2章では、『萬朝報』以外の新聞に掲載された新聞投稿漫画『時事新報』や『東京二六新聞』などに掲載された新聞投稿漫画について、また、同時代に活躍していた職業漫画家である北沢楽天、岡本一平の新聞漫画について「端書ポンチ」と比較し考察を加えた。第3章および第4章では、主な投稿者と「端書ポンチ」に描かれた主題について考察した。その結果、常連投稿者の登場回数も年を経るにつれて変化が見られ、1913年以降に多く掲載された投稿者の絵柄の方が単純化し、人物やものの特徴を捉えるのが上達し、分かりやすい風刺方法になったと解釈している。さらに「端書ポンチ」に書かれた主題を、外交（国際）、政治（内政）、経済、社会、文化、その他の6つに分類し、前期と後期における割合をそれぞれ検討した。結果、全体を通して外交と政治に関するものが多く、主題の推移は当時の政治社会状況に密接に連動していることが明らかとなった。また、常連投稿者が取り上げた主題については、投稿者ごとに傾向がわかれ、投稿者によって関心の深さの違いを窺わせる。なお、それぞれが選択した主題は各自得意とする描き方を活かせる主題を好んだ傾向があったと解釈している。

第5章では、「端書ポンチ」に登場した「国民」や「市民」について、掲載数の推移と主題の傾向と描かれ方を分析する。「国民」や「市民」が各年どのくらい登場したか検討したところ、年々増加傾向があることが数値的に明らかとなった。前期では1911年から「国民」や「市民」が急増し始め、281点であったのが後期は448点と倍近くの数字になり、特に1920年頃から次第に高まる普選要求とともに登場回数が顕著となった。全期間にわたって「国民」「市民」が登場した主題は政治の割合が圧倒的に多く、そのことは「国民」や「市民」の政治に対する関心の高さが窺える結果であるともいえる。また、『萬朝報』が、政治を主題とした「端書ポンチ」を採用したことで、『萬朝報』自体の政治への要求が次第に強くなっていった証左にもなり得ることを指摘している。

審査の結果の要旨

本論文は1892年に創刊された新聞『萬朝報』紙上に、1907年1月から1924年6月まで17年半の間、ほぼ毎日掲載された投稿漫画欄「端書ポンチ」6,262点について、投稿者の人物像や特徴、主題の傾向から、分析を試み、「投稿」という特色を備えた「端書ポンチ」の意義を検討している。著者は、まず「端書ポンチ」の始まった背景や他紙の投稿漫画欄、職業漫画家の新聞漫画について比較検討している。具体的には『時事新報』や『東京二六新聞』の掲載漫画について取り上げ、また、同時代に活躍していた職業漫画家である北沢楽天、岡本一平の新聞漫画について「端書ポンチ」と比較し考察を加えている。なかでも、紙面漫画づくりに、市民である投稿者の創意を取り入れた双方向的なありかたは、他の短命に終わった投稿漫画と相違し、新聞社、投稿者、読者で構成される息の長い独自のシステムとして機能しており、職業画家を採用して新聞社の意向を漫画に反映するあり方も相違した、『萬朝報』における読者の意向反映のあり方として認められることを指摘して、結論としている。

第3章及び第4章では分析した常連投稿者の推移と投稿主題の変化は世相が直接反映していること、また投稿者独自の得意な描き方を生かせる主題が好まれ掲載される傾向にあったと解釈した。この分析を踏まえて、第5章では「国民」や「市民」の掲載数、描かれ方を分析し、普選要求とともに、「国民」「市民」が登場した割合が上昇することから、投稿を通して読者の意向を反映した、『萬朝報』自体の政治への要求の高まりについても考察している。

著者は、また、投稿漫画の常連のその後の経歴についても調査を行い、後期における常連投稿者から職業漫画家となっていった作家を取り上げ、アマチュアからプロへと移行していった投稿者の表現にも注目して

いる。

明治末から大正期にかけてのジャーナリズムと投稿漫画については先行研究が十分になされていないなかで、著者は従来、概括的にとらえられてきた投稿漫画について詳細な研究を進めた。特には、17年半にわたる「端書ポンチ」欄掲載の一点一点に注目し、膨大な量の画像の資料分析を試み、考察を行い、投稿者たちの表現方法の変遷や意見、要求について解釈し、領域を越えた好個の資料性を有する漫画欄であったと結論づけている。全画像を対象として分析する研究姿勢はきわめて実証的で、その研究成果として本論文は学術的、資料的価値の高いものと評価したい。その一方で、新聞編集部と漫画採用方法やその過程について具体的な解明が十分なされたとはいいがたく、今後の課題としてさらに研究を進めることを求めたい。

論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。